

## 令和5年度 博物館実習報告

### 博物館実習施設一覧

実習施設名	人数	氏名
世界淡水魚園水族館 アクア・トト ぎふ	1	木下拓実
鳥羽水族館	1	吉崎茉菜
太地町立くじらの博物館	1	本多知佳
大阪市立自然史博物館	1	尾上聖衣
兵庫県立人と自然の博物館	1	三木悠輝
姫路市立水族館	1	平尾 匠
笠岡市立カブトガニ博物館	3	高見帝我 松本侑真 池原正恒
宮島水族館	1	佐野太志
下関市立しものせき水族館 海響館	2	安保知哉 八田 瞳
マリホ水族館	1	迎川陽平
倉敷市立自然史博物館	1	八木悠介※
島根県立宍道湖自然館ゴビウス	1	山崎亜蓮
虹の森公園 おさかな館	1	兼松良介
桂浜水族館	1	加地望鈴
マリンワールド 海の中道	1	西村康太郎
大分マリンパレス水族館 うみたまご	1	古川瑠里
九十九島水族館海きらら	2	内野 慧 川寄文太
黒島研究所	1	玉井優希
海洋博公園（美ら海水族館）	1	若松朋花
合計 19施設	計23名	

※ 実習期間が令和6年のため、博物館実習報告書は令和6年度に掲載

学生番号・氏名 : 6320039・木下拓実  
実 習 先 : 世界淡水魚園水族館 アクア・トト ぎふ  
実 習 期 間 : 令和5年8月10日(木)～令和5年8月20日(日)

実習目的：今回の実習目的は、学芸員養成課程を通して学習した展示開発、来館者への教育普及活動、資料の保存・管理についての知識を活用しながら実務を経験し、世界淡水魚園水族館 アクア・トト ぎふ に勤めている職員のような学芸員となり来館者の方に楽しみながら展示生物について学習する機会を提供する上で必要な知識と技能への理解を深めるためである。実習の内容に「展示飼育部における生物の展示飼育業務ならびに体験学習プログラムの補助」、「教育普及活動の実践としてプログラムの企画・実施・評価」といったものがあつたが、これらの実習内容を通して飼育業務において求められる知識と技能、体験学習プログラムの実施や来館者の対応を行う中で注意すべきこと、実際に職員がどのようなこだわりを持って業務に務めているのかを学習する為に実習に参加した。

実習概要：午前では、開館作業として一階タッチプールの掃除やカピバラ水槽の掃除、三階のコサギ水槽、カモ水槽の掃除を行った。その他、魚類班と動物班が行っている業務である調餌と給餌、一部の飼育生物の残餌回収と残餌の質量の計測を行った。体験学習チームの業務ではバックヤードツアーの準備作業と職員の補助、ものづくりワークショップでの来館者への対応と呼び込みといった作業を行った。午後からは展示生物を題材にしたクイズラリー冊子の作製、調餌場の掃除、ゴミ捨て、タッチプールのエサガチャの準備、展示生物を題材として来館者に資料に触れながら生物の生態について解説するハンズオンガイドの企画・実演・評価を行った。ハンズオンガイドでは館内に展示されているアマゴやイワナ、スズキ、ボラといった名前の変化する魚類を題材とし、親子連れの来館者が楽しみながら学習できるものを実演することを目標として取り組んだ。

実習成果：実習中は水族館の学芸員に求められる力や職員が理想とする学芸員像について伺ったところ、社会人としての基礎や人とかかわる力といった人間力、目標達成に向かって最後まで取り組む力、探求心、生体を管理する為に扱う装置の構造や修理方法への理解、水族館での業務に関わる自分にしかない強みが必要だということを知った。私は人間力が不十分であることや自分にしかない強みを持っていないことが課題点として確認することができたため、これらを身に付けるよう努めていきたい。課題となっていたハンズオンガイドの企画・実演・評価においては、実演当日は想定通り親子連れが参加し、殆どの来館者が最後まで参加した。このことから、目標としていた親子連れの来館者を対象とし、楽しみながら勉強することが可能なハンズオンガイドの実施を達成できたと思われる。実演後の他の実習生との評価会からは、企画者が伝えたいことだけではなく、来館者にとって有益な情報を含んでいるのかを考慮することが重要だと学習した。

感 想：幼少期から憧れていた園館での実習ということもあり、終始緊張しながら実習に参加していたが非常に充実した時間を過ごすことができた。今回の実習で学んだことを活かし「アクア・トト ぎふ に勤めている職員のようになり、来館者に楽しみながら展示生物について学習する機会を提供する」という幼少期からの目標を実現したいという気持ちが更に高まった。下級生へのアドバイスとしては、実習開始時は作業を一つ一つ行うことに精一杯になると思われるが、作業を行うだけでなく作業を行う目的を考えながら行うと良い。こうすることで作業において必要なことや職員のこだわりについて気づきが見つかる。また常に感謝の気持ちを持って実習に取り組むことである。実習先の職員はお忙しい中自分たちに多くの時間を割いて指導をしていることから常に感謝の気持ちを持ち、挨拶等で行動に示すと良い。その他に実習中はメモを取ることが多くなるが、職員の説明や作業が止まらないように移動中といった隙間時間やお昼の休憩時間に思い出しながらメモを取るとよい。

学生番号・氏名 : 6320121・吉崎茉菜  
実 習 先 : 鳥羽水族館  
実 習 期 間 : 令和5年10月10日(火)～令和5年10月24日(火)

実習目的：生き物をより自然に近い環境でストレスなく管理する技術や方法等を知るため、「飼育管理の基本業務を学ぶ」ことを実習の目的とした。水族館で展示されている水生生物の多くは、自然界から採集され、飼育・展示された個体であり、それらを長く飼育し、繁殖させていくためには、飼育技術、繁殖技術の向上が不可欠であるため、自然界で彼らがどのように生活しているか知ることはきわめて重要なことだと考えた。鳥羽水族館はこれまでに世界各地で調査研究活動を地道に続けている。それが、飼育種類数日本一であることや、個々の飼育生物にストレスを与えない環境づくりや飼育方法を日々研究し実行していると考えられる。その飼育管理の基本業務を学ぶことは学芸員として来館者に正しい知識を伝える力やノウハウを身に着けることに繋がると考えた。そして、学芸員がどのような思いで日常業務と調査研究を遂行されているのか知りたいと考えた。

実習概要：実習生のスケジュールを記載する。調餌室準備を行い、その後ペンギン水槽掃除を行った。再び、調餌室にて餌分けと計量を行い、その作業が終了したらただちにイロワケイルカの給餌を行った。次にセイウチショーの準備、後片付けを行った。セイウチショーでは音響を担当した。その後、バケツ洗いをを行った。再度セイウチショーの準備、後片付けを行った。次に海獣の王国餌準備、バケツ洗いをを行った。その後、フラミンゴの掃除、給餌を行った。田んぼ水槽の周辺の水槽に給餌を行った。水草水槽では、メラニンスポンジで水槽を掃除し、給餌を行った。そして、館内清掃を行い、1日の作業終了。13日間はこのスケジュールを行い、最終日はラッコ等の生物を担当した。課題は、圧力式ろ過と重力式ろ過のメリット・デメリットを記述することや生き物を取り扱う法律を調べ、館内にいる生き物のどれに当たるか記述した、館内のラベルの良い点、悪い点、自分はどうか等の内容であった。

実習成果：日常業務を行う中で、飼育管理の基本業務を学び、給餌がどれだけ大切な行為であるかを学んだ。鳥羽水族館では魚の匹数と重量のどちらも記録している。それは動物が食べなかった場合、何グラム減らすのかということの計算に使われており、それだけでなくカロリー計算や脂肪分の成分分析なども行っている。どこまで追求するかは園館によって違うが、健康管理のためには必要なことであり、そういった問題を正確に把握することが飼育種類数日本一であり、個々の飼育生物にストレスを与えない環境づくりに繋がっていると感じた。また、給餌が生き物にとってどれだけ大切な行為か考えさせられた。目が悪くなりハンドサインが使えずとも、ボイスサインを使って体を動かすことで、他に異常がないかを確認をするなど生き物自身のできることを増やすことが運動不足解消や寿命にも関わってくると感じた。給餌は餌を与えるだけでなく、健康状態の確認や体の状態をよくするなどたくさんの意味合いがあると気付くことができた。

感 想：実習生から実習生へ引き継ぎもあり、業務をしっかりと理解することが重要であった。1日目に業務を教わり、2日目からは一人で作業を行うため、鳥羽水族館を希望する学生は、引き継ぎがあることを初めから頭に入れておくとよい。最終日には、実習生のリクエストを聞いていただき、ラッコやジュゴン、アシカ、淡水魚、海水魚など特別にスケジュールを組んでいただいた。実習を通して、生き物に対する考え方や来館者だけでなく生き物たちが水槽から見えている景色など現場に行き行って感じることも多く、栄養面や行動の意味を読み取ること、給餌の様子で確認するべきことなど自分自身では気づくことができなかったことを学ぶことができ、とても貴重な経験であった。初めのうちは業務をこなすことに精一杯で大変ではあったが、とても有意義な時間を過ごすことができた。

学生番号・氏名 : 6320098・本多知佳  
実習先 : 太地町立くじらの博物館  
実習期間 : 令和5年10月4日(水)～令和5年10月14日(土)

実習目的：私が現在理想とするのは、常に最適な飼育方法を考え、調査研究、教育に力をいれた水族館づくりができる学芸員である。太地町立くじらの博物館は、多様な鯨類を数多く飼育しており、調査研究にも取り組まれている。太地町立くじらの博物館での実習で、種に合わせた飼育方法や長期飼育していくための工夫、調査技術などについて詳しく学びたいと考えた。生体を目の前で見て、来館者に興味・関心を持ってもらうことが水族館の大きな役割であると私は考えているが、その姿は時代とともに変化していかせようかと予想している。水族館はどうあるべきか、実習を通して考えたいと思った。また、現場でどのような人材が求められているのかについても知りたいと思った。そのため、生体を飼育する上での知識や技術を学ぶこと、水族館のあり方について考えること、そして、求められている学芸員の資質や姿勢を学ぶこと、この3つを実習の目的とした。

実習概要：実習中に行った主な業務としては、調餌、給餌見学、ショー見学・補助、片付け・掃除などが挙げられる。太地町立くじらの博物館では、野外で飼育している鯨類が多いため、餌が傷まないようにクーラーボックスに餌と氷、塩素水を入れて持ち運び、給餌を行っている。調餌では、そのクーラーボックスの中の水を換える作業、水換えを行った。給餌見学では、生け簀まで餌を運び、給餌の様子やトレーニングの様子を見学したり、検温や点眼の補助を行ったりした。ショー見学・補助では、イルカショー、クジラショーを見学し、そのショーでの個体の動き、観客の反応を観察した。また、ショー終了後に行われるイベントの準備や誘導など、接客補助も行った。片付け・掃除は、基本的に調餌場で行った。空になったクーラーボックスや調餌の際に使用したものを洗い流した。また、1日の餌出しが完了したら調餌場の中を塩素で掃除する作業も行った。

実習成果：実習中にハンドウイルカ、カマイルカ、スジイルカ、ハナゴンドウの給餌を行った。実際に自分が給餌すると、訓練されていない個体ではその場を離れてしまうことがあり、上手に与えることができなかった。このことから、生体、特に鯨類の飼育においては日々のトレーニングの積み重ねが健康を守る上で非常に重要であると分かった。また、ショーの観客、餌あげ体験をする人の反応を見て、動物が人に与える感動の大きさを改めて感じる事ができた。飼育に対して厳しい意見が見られるようになっているが、鯨類を見たい、知りたいと思って来館する人が多いことを考えると、そうした生き物に触れる場を今後も残していくべきであると私は思った。そして、実習を通して、水族館で働く上で必要なことも理解することができた。それは、コミュニケーション能力、観察力、そして飼育環境やトレーニングをより良くすることを考える、向上心である。動物に対する愛情はもちろん、生体を相手にする人として、これらの力や心構えが大切であると思った。

感想：私は、くじらの博物館で実習を受けさせていただくことができ、本当に良かったと感じている。理由はトレーニングについて詳しく伺ったり、140頭近くの鯨類を管理する場を見学したり、この博物館でなければできない経験が多くできたからである。ショーやトレーニングを見学していて、どのように技を教えるのか、サインと技をどのように結びつけるのかなど、知りたいと思うことがいくつもあったが、それに対して分かるまで丁寧に教えて下さった。この実習を通して、改めて自分も鯨類の魅力を伝えられる人になりたいと感じることができた。下級生には、実習を受ける際は積極性、自ら行動する姿勢が大切であるということをおアドバイスとして伝えたい。疑問に思ったことは全て質問することで、実習を通して得られることが多くなると感じた。最後に、博物館実習を行う上で協力して下さった太地町立くじらの博物館の飼育員の方々、先生方に感謝申し上げたい。

学生番号・氏名 : 6320022・尾上聖衣  
実習先 : 大阪市立自然史博物館  
実習期間 : 令和5年11月14日(水)～令和5年11月19日(日)

実習目的: 私は次の2つのことを目的として学外実習に取り組んだ。1つ目は、「教育的な活動」について学ぶことである。この博物館はワークシートの開発や様々なイベントの開催など、特色のある教育活動を活発に行っている博物館の1つだと考えている。そのため、実習を通して人々の興味・関心の対象や惹きつける方法や楽しく学んでもらうためのノウハウなど、様々なことを見聞きして学びたいと考え実習に取り組んだ。2つ目は、「地域と博物館の関わり」について学ぶことである。この博物館では友の会を始めとした様々な団体が活動しており、今回の実習で関わった「大阪自然史フェスティバル」ではその団体の方々と関わる機会が多くある。その中で、身近な自然をどのように活動することができるのか、地域について知ることが人々の意識にどのように影響をしているのかなど、効果や現状について学びたいと考えて実習に取り組んだ。

実習概要: この実習は自習期間中に行われる「大阪自然史フェスティバル2023」というイベントの設営・運営・撤収作業に携わり、この博物館の教育普及活動について学ぶという内容であった。1日目はオリエンテーションが行われた。座学として博物館の説明を受け、その後は収蔵庫・展示室の見学を行った。2・3日目はイベントの準備として、掲示物の準備や貼り付け、椅子・机・パーテーションの設置など会場の設営作業を行った。4・5日目はイベント当日であり、搬入・撤収作業の補助とスタッフとしてイベントに携わった。イベントの開始前・終了後には搬入撤収作業の補助を担当し、案内や物品の貸出などを行った。イベント中は質問対応や受付業務など出展者・来場者への対応や、イベント会場の見回りが主な仕事であった。最後に課題として、実習生ブログの更新が課された。各実習生が実習日の1日を担当し、実習内容と感想をまとめて所定のサイトに投稿し提出をした。

実習成果: 今回の実習を終えて、次の2つが成果として得られた。1つ目は、地域や人々と博物館の距離が近いことで得られる影響について実感できたことである。今回携わったイベントでは、学芸員やスタッフなど博物館側の人々と参加者・出展者の距離が近く、気軽に話ができる環境であった。その中で、互いに交流をして情報を交換し合ったり、新しい分野に触れたり、交流の輪が広がっていたと感じている。敷居の高さを感じやすい博物館や自然史の分野において、気軽に話ができる環境やイベントは貴重であり、博物館と人々や地域双方にとって良い機会になっていたと感じた。2つ目は、自然や生物に興味を持ってもらう方法には様々なものがあるということである。今回のイベントで様々な団体・個人の方と交流したが、様々な手法で参加者にアプローチを行っていた。例えば、チラシや冊子など紙媒体を配布するだけでなく、ワークショップのような体験的な活動などが挙げられる。対象として設定した相手によって様々な手法が取り入れられていたと考える。まず、知ってもらうための活動として、このような活動者が集うイベントは重要になっていると感じた。

感想: 今回の実習で私は博物館と人との関わりについて新たに学ぶことや考えることが多かったと感じている。今回実習させていただいた大阪市立自然史博物館のように、地域と密接に関わり、人々に開かれた博物館が増えていって欲しいと強く思った。また、私たちのような10～20代の若者を参加者・出展者共にあまり見かけなかったと感じた。全ての人に興味を持ってもらうために、この世代に対して何かアプローチをすることも重要になっているのではないかと考えた。最後に、この実習は学芸員だけでなく自然に関わる様々な立場の人々と関わる内容であった。そのため、人と博物館の関わりについて学びたい人や自然の魅力・問題を人々に伝える活動がしたいという学生には是非行って欲しい実習先だと私は考える。

学生番号・氏名 : 6320105・三木悠輝  
実習先 : 兵庫県立人と自然の博物館  
実習期間 : 令和5年7月22日(土)～令和5年8月2日(水)

実習目的：学外実習を通して学習したいことが大きく分けて2つある。1つ目は、博物館の実務で必要となる基礎的な展示と資料の製作技術を学ぶことだ。樹脂封入標本、プラスティネーション、デジタルコンテンツの製作などの実習を通して、博物館の実務で必要となる基礎的な展示と資料の製作技術を知り、この技術を元に環境保全活動、研究に役立てたいと考えている。2つ目は、私の持つ人に教える技術を活かす、進化させることだ。展示物作成などを通して教職科目とは異なる教育技術に触れ、私の持つ他人に教える技術を活かし、進化させたい。また、幅広い年齢層に向けて知識を提供する機会がある為、教育実習や教職科目では得ることができない全年齢層を対象にした教育技術を磨くことを目的とする。

実習概要：私は「自然史博物館の標本および展示制作技術の実習」のコースを実習することとなった。1日目はオリエンテーションで実習中の注意事項を受け、資料の保管庫の見学を行った。2日目は甲南大学の学生たちとともに住吉川の調査及び子供たちへ向けての生物調査のセミナーを開いた。3日目～6日目は幼稚園、小・中学校の先生を対象にしたセミナーのスタッフを行った。7日目は神戸(三宮)周辺に位置する東遊園地にてアルゼンチンアリの調査及び駆除を行った。8日目～10日目まで調査で採集した生物のプラスティネーション、封入標本作りや「住吉川の調査結果」、「アルゼンチンアリの脅威」についての展示物作成を行った。展示物作成における私の担当は「住吉川の調査結果」、「アルゼンチンアリの脅威」についての動画作成であった。

実習成果：10日間の博物館実習を通して様々なことを学ぶことができた。中でも、標本作りと資料の保存方法について多く学んだ。標本作りでは、大学の研究室でも使用する液浸標本や樹脂で作るプラスティネーションなどの標本を作成した。プラスティネーションと封入標本に衝撃を受けた。封入標本は、小さな子供が触ることができ、壊れにくい特徴を持っている。一方、プラスティネーションも封入標本と同様に触れることができるが、壊れやすい特徴を持っている。基本、標本は丁寧に触らず保管するものだが、触る、見せることを目的とした標本を初めて知った。また、作ることが簡単で材料さえ揃っていれば作ることができる。福山大学マリンバイオセンターでは、プラスティネーションや封入標本のような触れることのできる標本を展示していない。その為、博物館実習を通して、学んだ標本の知識を活かして、展示物を作成したいと思った。展示物を作成する際にターゲットとする年齢を決めずに誰が見ても分かる展示物にすることがとても大変だった。しかし、展示物作成を通して実習目的でもあった「全年齢を対象にした教育技術」を達成できたと感じている。

感想：1日目の資料保管庫の見学や3日目～6日目のセミナーを通してタンバスズキリュウや昆虫たちのタイプ標本を初めとする貴重な資料を見せてもらい興奮した。この経験から資料の保存方法や資料を保存する意義について改めて考えさせられ、大学の講義では学習することのできない貴重な体験をした。また、展示物を実習生たちと協力しながら作成することも良い経験となった。実習で初対面の8人と連携し2つの展示物を作成することが非常に困難だった。しかし、1人1人様々なスキルを持っており、先生が指示を出さなくとも勝手に作業をはじめ満足いく展示物を作成した非常に良いチームであった。漫画をペンタブで描いたり、パワーポイントで資料を作成したり皆各自の特技を持っており頼もしかった。私も得意の動画編集技術でチームに貢献することができたが、実習前までには役立つ特技を身に付けてから実習に臨むことが良いのではないかと思った。

学生番号・氏名 : 6320086・平尾 匠  
実 習 先 : 姫路市立水族館  
実 習 期 間 : 令和5年11月1日(水)～令和5年11月6日(月)

実習目的：私が理想とする学芸員像とは、水族館で飼育せれている生き物の生態、生き物が生息している環境だけでなく、展示せれている生き物の中には自宅でも飼育することができることを伝え、老若男女問わず多くの人が生き物と触れ合えるきっかけ作りができることだと考えたため、そのような学芸員を目指したいと思った。「姫路市立水族館」では子供が触りやすい位置にハンズオン展示が施されているだけではなく、生き物の生態や今おかれている環境のことまでも伝える展示があり子供から大人まで楽しめる水族館だと思った。また、パンフレットには展示生物の飼育方法も細かく記載されており来館されて方々が興味を持てるように工夫がたくさんされていると感じた。様々な工夫で長年来館者から愛されている姫路市立水族館で生き物の生態、環境を学ぶとともに生き物の基本的な飼育方法や専門的な飼育方法を身に付け、来館者により生き物に興味を持ってもらえるように発信したいと思い「姫路市立水族館」での博物館実習を希望した。

実習概要：博物館実習1日目の午前中は姫路市立水族館の水族館概要、水族館で使用しているろ過システム、兵庫県で行われている漁業の種類を主に説明されその後施設見学を行った。午後は新館でのケヅメリクガメの餌やり、バックヤードの水槽掃除、給餌を行った。2日目も新館で一日目に行った作業に加えてタガメの給餌、アクア・ラボと言われる生き物の生態、習性、特徴などをお客様に説明する仕事の補助を行った。3日目と4日目の午前中は本館で飼育水の塩素濃度の測定、本館での給餌準備、給餌作業、企画イベントの会場設置、種名板に使用する写真撮影を行った。4日目の午後は水族館の事務作業を行い水族館で販売しているキーホルダー、紙帽子、館内放送を行った。5日目は漁業に行き、魚の同定作業に必要な魚のサンプリング、せりの見学、魚の同定作業を行い、なぜ標本にするのか、学芸員に求められるものなどの説明を受けて博物館実習を終了した。

実習成果：今回の博物館実習で水族館で働くためには魚類以外の知識がいることを学んだ。当然魚の知識も必要になってくるがそれ以外にも両生類、爬虫類、植物などの生き物の知識以外にも水族館で使用している電気回路、生き物の生態、習性、特徴その生き物の個性を来館者に知ってもらうための話し方、声のトーン、大きさや、標本作成に必要なもの、標本作成の意味などを学んだ。また、飼育業務以外にも水族館で販売しているキーホルダー、紙帽子の作成、館内放送などを経験しこのような仕事も水族館を支えていることを改めて理解した。また、博物館実習最終日に博物館実習担当者から学芸員は様々なことに疑問をもってどん欲に調べることや、殺してしまった命、死んでしまった命を少しでも意味のあるものにする必要があると標本を作製をする意味を教えてもらい理解した。

感 想：姫路市立水族館での博物館実習は自分の知識不足を痛感した。魚類、両生類、爬虫類、植物の知識以外にも、兵庫県で行われている漁業の種類、標本のサンプリング、標本作成、標本作成の意味など様々な知識が水族館業務に必要であること学んだ。また、水族館で飼育している魚類以外にも兵庫県、瀬戸内海でよく水揚げされる魚類についてよく調べ、瞬時に見分ける必要があると思った。なので、普段釣りをしない人は釣りや朝市に行き魚の観察をすることで、水族館で飼育している魚と漁港で水揚げされた魚を今のうちに覚える必要があると思った。博物館実習の準備では早くから準備をする必要があると思った。博物館実習の申し込みの準備段階では4月1日から電話での博物館実習受け入れがあるので当日になったらすぐに電話をかける必要がある。また、博物館実習前にオリジナルのテキストを配布されるのでよく目として理解し記入をして博物館実習に臨む必要がある。総じて姫路市立水族館での博物館実習は大学生活4年間で特に印象に残るものとなった。

学生番号・氏名 : 6320065・高見帝我  
実 習 先 : 笠岡市立カブトガニ水族館  
実 習 期 間 : 令和5年8月18日(金)～令和5年9月5日(月)

実習目的：私は3つの目的を掲げた。1つ目は、「知識や技術など学芸員としての能力を身に着ける」である。私は実習において、多様なプログラムを経験し、地域の方と関わる能力やフィールドワークについてなど、学芸員としての豊富な知識や技術を身に着けることに重きを置いていた。多様な実習プログラムが用意されているカブトガニ博物館では、学芸員としての豊富な経験ができるため、多くの能力を身に着けたいと考えた。2つ目は「地域の人々と関わる能力を身に着ける」である。実習の中で、実際に学芸員としてイベントとを行ったり地域の方と交流したりすることで、交流において大切なことやコミュニケーションのスキルを身に着けたいと考えた。3つ目は、「カブトガニやその保護についての知識を学ぶ」である。カブトガニや生物を保護するという観点で重要なことを学びたいと考え、将来学んだことを活かして保護活動について考えることができるようにしたいと思った。

実習概要：まず基本的な日常業務としては、開館作業から始まり朝礼、館内の拭き掃除、カブトガニや展示生物の調餌・給餌、閉館作業を行った。カブトガニについては、捕獲された個体の記録・計測・ラベリングや幼生調査・採卵調査など保護する上で重要な記録や調査を行った。そしてそれらに加え、微小貝の採集、イベントの補助、解説板の校閲、海・川での生物採集、化石の採集・クリーニングなど、非常に多くの体験をした。さらに、展示物の解説やカブトガニ・化石・サメについての講義、天然記念物であるカブトガニの繁殖地巡りなど、学芸員からカブトガニ博物館で扱う資料についての解説を受けた。また課題として、採集した微小貝の同定やキャプションの作成が課された。図鑑を用いての同定作業や、工夫を凝らしたキャプション作製など学芸員としての技量が試された。

実習成果：まず、今回の実習を通してカブトガニやその保護について深く学ぶことができた。そのなかで、「カブトガニの気持ちになって考える」という言葉が印象に残っている。給餌の際エサを入れたケースに入れる水量についてカブトガニが起き上がる且つ、アルテミアが底に溜まるよう水位に保ち餌を食べやすいように考えていたり、採卵調査で孵化直後の個体を飼育ケースに移す際水質が悪化しないよう卵膜を排除したりするなど、各過程でカブトガニを配慮する工夫があった。飼育下で起こる弊害について考慮することが、保護において重要であると学んだ。そして、普段はできない本当に多くの経験をした。イベントの開催においては、わくわくを感じさせるための演出へのこだわりやカブトガニの放流も盛り込んでサプライズで行うなど、楽しんでもらうための工夫を当日の打ち合わせまで追求していたところに深く感銘を受けた。また、騒音が迷惑にならないよう注意するなど、近隣住民への配慮も重要な要素であり、イベントを開催する上で考慮すべき点についても学んだ。直接的な知識や技術だけではなく、学芸員としての考え方や取り組み方を知ることができた。

感 想：実習を終えて、初日の朝礼で目標に掲げたカブトガニマスターにはかなり近づけたのではないかと感じている。しかしその反面、カブトガニの奥深さを知り、まだ知らないことがたくさんあるとも感じた。そのため、今後も様々な観点からカブトガニを追求したいと思った。そして実習の中で、学芸員から多くの刺激を受けた。学芸員はカブトガニだけではなく、微小貝や化石、サメ、その他幅広い生物についての知識を持っており、私も今まで努力してきたつもりだったが、さらに知識をつけなければならぬと気が引き締まった。また、全体を通して筋力や体力の無さを痛感した。学芸員の仕事には体力仕事も多く、化石や生物の採集ではかなり疲弊してしまっていたため、体力面でも努力が必要だと思った。これらを踏まえ、私は実習を終えて、まだまだ学芸員としてのスキルが足りないと感じた。今後、就職した先でも学芸員の方々を目指して努力していきたいと思う。



学生番号・氏名 : 6320104・松本侑真  
実 習 先 : 笠岡市立カブトガニ博物館  
実 習 期 間 : 令和5年8月18日(金)～令和5年9月5日(火)

実習目的：私は、インターンシップやOB訪問などを通して、水族館で働いている学芸員が行っている活動や、水族館の学芸員の持つ役割についてはおおよそ理解していた。しかし、博物館の学芸員については触れる機会がなかった為、行っている活動やその役割についてあまり理解していなかった。その為、実習メニューが豊富な笠岡市立カブトガニ博物館で実習を行う事で、私達の身近な存在である水族館や動物園などの「学芸員」ではなく、博物館の「学芸員」の持つ役割とはどのようなものなのか、生物の保全を行うということはどういうことなのか、フィールドワークを行う上で大切なことは何か、施設を運営するために必要な責任のある行動とはどういう物なのか、来館者と接する上で意識していることは何かということをしつかりと学び、今後の自分の力にしていくことを実習の目的とした。

実習概要：実習では、運營業務、飼育業務、フィールドワーク、イベント、課題の作成を行った。運營業務では、恐竜公園の開錠及び施錠や博物館の開館及び閉館作業を行った。飼育業務では、カブトガニや飼育している魚類の調餌や給餌、水槽掃除を行った。フィールドワークではカブトガニの放流や干潟での野外調査、海や河川での生物採集や化石採集を行った。イベントでは、タッチングプールの補助やジュランピングという恐竜公園で行ったお泊りイベントの補助、小学校での出前講座、学芸員チャレンジの補助を行った。課題の作成では、実習前半は採集した微小貝の同定及び標本作製、実習後半は自分自身で決めた題材についてのキャプションを作成した。私は、出前講座の際に解説を担当した「ボトリオレピス」という板皮類について、その形態や出現する化石の特徴について、化石の作られ方という観点からまとめたA4サイズ1枚のキャプションを作成した。

実習成果：まず、博物館の学芸員の持つ役割については、実際に様々な業務を体験したことで、博物館の学芸員は、博物館の持つ4つの役割である「資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及」のすべてに関わり、博物館の運営そのものを担っていることを学んだ。つぎに、生物の保全については、カブトガニの放流や野外調査を通して、実際に現場を訪れて、自身の目で現状を確かめることや、継続的に啓発活動を行うことが大切であると学んだ。そして、フィールドワークを行う上で大切にしている事については、必要な物の準備をしつかりと行うことはもちろん、あらゆる事態を想定して対策を講じておくことが大切だと学んだ。さらに、施設を運営するために必要な責任のある行動については、学芸員が朝一番に来て作業をし、夜も一番遅くまで作業をしている姿から学ぶことができた。来館者と接する上で意識している事については、学生は来館者に質問された際、自分が分からないことは分からないと言い、学芸員に助けを求める必要があるという事から、間違った知識を広めないようにしていることを学んだ。

感 想：今回の実習では、様々な実習内容や日常的な作業から、博物館の学芸員の在り方について学ぶことができた。特にジュランピングでは、企画を運営する側の行動を間近で見ることができただけでなく、実際に体験することができたので、学芸員が企画を行う際にどのような行動をとる必要があるのかという事について、非常に多くの事を学べた。反省点として、実習に必要な書類の作成が直前になってしまった事や、提出課題をなかなか完成させられなかった事が挙げられるため、今後はスケジュール帳やカレンダーなどを活用しながら時間を有効に使っていきたい。下級生へのアドバイスは、学生は実習先の博物館の善意によって受け入れてもらっているという事を忘れないようにという事である。最後に、今回の実習で様々な貴重な体験をさせていただいた森信敏様、東川洸二郎様、二宮颯人様に厚く御礼申し上げます。

学生番号・氏名 : 9612301・池原正恒  
実 習 先 : 笠岡市立カブトガニ博物館  
実 習 期 間 : 令和5年8月18日(金)～令和5年9月2日(土)

実習目的：今回の実習目的は2つある。第一の目的は生物の生活を知ってもらい、なぜ生物を守る必要があるのかを体験および理解してもらうための方法を修得することである。その目的達成のためには、今回の実習先として一般の人に向けて専門性の高い内容を、わかりやすくかつ面白く発信しているカブトガニ博物館での実習を希望した。その他にも野外での実習も実施する必要があると、生物を守る必要性を学芸員の立場から考えられるようにしたいと考えている。第二の目的は、生体や展示資料の維持管理方法等を修得することである。そのためには、博物館で飼育している生体や、展示資料の中には非常に貴重で、替えのきかないものがあるので、それらをただ単に飼育、保存するだけでなく、一般の方に興味を持ってもらうための展示という観点から、どのように生体を飼育し、資料を保存するのか、その具体的な方法をこの実習において身につけたいと考えている。

実習概要：今回行った実習内容は主に4つある。1つ目は、開閉館作業や当該博物館で飼育しているカブトガニへの給餌作業、展示水槽の掃除・換水作業や展示物の維持等の博物館運営に関する業務である。2つ目は、採集した微小貝及び化石における図鑑を用いた種の同定と標本作製、カブトガニに関する調査（生体情報の記録、幼生調査や館内産卵池に産み付けられたカブトガニ卵の採集等）や展示のための淡水/海水生物の採集等のフィールドワークである。3つ目は、館内展示物、収蔵庫内資料や化石採集時に必要な基礎知識のレクチャー等の講座である。4つ目は、来館者を想定してのキャプション作成や、小学校の子ども達に対して化石の解説を行う出前授業等の課題である。その他、当該博物館公園内でキャンプをする「ジュランピング」や、子ども達を対象とした学芸員の仕事を体験する「学芸員チャレンジ」の様なイベントの運営準備を行うだけでなく、実際に参加もした。

実習成果：第一の実習目的に対する実習成果は主に4つある。1つ目は、生物の棲息地や形態的特徴を的確に捉えるための「生物採集・種の同定方法」である。2つ目は、生物のもつ特徴を保存するための「標本作製方法」である。3つ目は、生物のもつ情報を対象者に合わせ適切に伝えるための「キャプション作成方法」である。4つ目は、自然界における生命の営みを実感させ、想像させるための「生体展示方法」である。これら4つの方法を通し、まず自身が生物を深く理解することの重要性を学んだ。第二の実習目的に対する実習成果は、「生物の歴史を体験できる様な展示方法」である。展示物をテーマ毎に分け、かつ時系列的に展示する方法は、一般の方が興味を持ちやすいのではないかと実習を通して学んだ。また、展示資料（標本や化石）の維持・管理は展示ケースに防腐剤を設置し、本物の展示が困難なものはレプリカを展示していた。その他、収蔵庫内では、木製の壁による湿度調整がされていた。これらのことから、シンプルな方が資料の維持・管理が容易であることも学んだ。

感 想：当該博物館での実習を一言で表すと、非常に充実した実習であったといえる。実習内容は多岐にわたり、学芸員としての仕事を余すことなく経験できたと思う。恐らく他の園館ではここまでの経験はできなかったであろう。実習期間中は作業を覚えることで精一杯であったが、学芸員としての仕事をもう少し続けたいと思った。一方、私が学芸員を目指すにあたり、課題も浮き彫りとなった。1つ目は体力面である。実習期間中は早朝から夜遅くまで実施することもあり、疲労困憊になってしまうことが多々あった。2つ目は知識である。学芸員の方はカブトガニに対する知識はもちろん、その他の生物にも精通しており、自身の知識の乏しさを痛感した。これらの課題をクリアし、自身の理想とする学芸員を目指したい。最後に、実習を受け入れてくださったカブトガニ博物館の学芸員の方々に多大なる感謝の意を述べたいと思う。

学生番号・氏名 : 6320053・佐野太志  
実 習 先 : 宮島水族館  
実 習 期 間 : 令和5年8月29日(火)～令和5年9月4日(月)

実習目的：宮島水族館は瀬戸内海をテーマとしつつ、世界遺産である厳島神社の景観を損なわない展示が求められており、通常とは違った条件の中で展示方法を考える必要がある。この条件で飼育や展示にどのような工夫がなされているのか、特に環境再現型展示について知りたいと思った。環境再現型展示は教育普及施設である水族館において普段見られない自然の生き物の姿を見てもらうことができ、飼育する生き物が生息する環境を再現するため水族館で重要視される「環境エンリッチメント」にも関わっている。また、私自身特に印象に残っている展示である「海のめぐみ水槽」が環境再現型展示にあたるので、展示までの苦労や展示における工夫を学ぶことを目的とした。また、観光地である宮島では様々な場所から来館者が訪れるため、どのような来館者にも対応するためのノウハウやマナーを学芸員の視点で学ぶことも目的とした。

実習概要：宮島水族館では主に海獣類飼育業務、魚類飼育業務、水槽解説を行った。海獣類飼育業務では調餌、イベント準備、片付け、誘導、給餌見学、厩舎掃除を行った。ここでは、海獣に襲われるという危険が伴うため基本的に海獣に近づくことは無かったが、体温測定や給餌の見学では至近距離で見学することができた。魚類飼育業務では調餌、給餌見学、予備水槽清掃、逆洗見学、生体搬入、イベント案内、種名版撮影を行った。イベント案内ではチリメンモンスターを探す体験イベントを行い、最初は入り口の案内のみであったが実際に来館者と会話しながらイベントを進めることもできた。水槽解説は最終日に行い、その日までの実習で見てきた水槽から解説したい水槽を選び解説内容を考えることから行った。私は宮島の干潟水槽の「カサゴ」についてタブレットを用いたポイントガイドを行い、水槽の中を見てもらいながら生態や特徴を解説した。

実習成果：展示するまでの工夫については「餌」について学ぶことができた。飼育生物は家畜ではないため給餌方法に工夫が必要であり、展示する水槽に入れるまでが大切であるということが分かった。実習では「ナルトビエイ」について説明があり大水槽では餌を撒いても他の生物に取られるため展示水槽に入れる前に円形的水槽で回って泳ぐように学習させ手で直接餌を与える方法で飼育できるようになったということを聞くことができた。環境再現型展示については「環境再現」について考えが広がった。実習に行く前までは生き物の環境を再現することにしか目がいかなかったが、展示している場所も環境に含まれることが分かった。宮島水族館の「海のめぐみ水槽」では展示フロアの背景を展示してある筏に合わせて宮島の海の景色にし、のぞき穴がある台は船の甲板を再現し実際に筏の横に船で来ているように感じさせる空間になっていた。このように環境再現型展示とは生き物の環境を再現するだけではなく、来館者が学ぶために環境を再現することもできるということが分かった。

感 想：宮島水族館での学芸員実習は、普段は入れない場所に入り作業する貴重な体験であったが普段の活動と変わらない基礎の活動も多々あった。今回の実習ではろ過マットの清掃、水槽の壁面掃除、搬入時の水合わせなどを行い、これらについて最低でもやってはいけないことについては理解しておく必要があると思った。マナーや身だしなみについては基本だが、初日から来館者の前に立つことがあったので常にみられているということを頭に入れて実習を行った。宮島水族館は観光地ということもあり海外の方が多く印象を受けた。そのため案内をすることが難しいということがあったが、英語で話すことができなくてもジェスチャーなどで伝えることに努めることが大切であった。何をしても分からないことや不安があるときは迷わずに質問することが大切で、勝手な行動で問題になることが最もやってはいけないことだと思った。

学生番号・氏名 : 6320004・安保知哉  
実習先 : 下関市立しものせき水族館 海響館  
実習期間 : 令和5年11月6日(月)～令和5年11月20日(月)

実習目的：海響館では「展示を用いた教育活動」に力を入れており、海洋ごみを題材としたイルカショーや下関の歴史を魚とともに紹介するなど、様々な工夫が見られた。その中で私は、学芸員養成課程を通して、博物館における教育普及活動について理解を深めるため海響館での博物館実習を行った。水族館が持つ教育普及活動については博物館教育論や生涯学習概論などの講義により理解を深めることが出来たが、民営の水族館などの現場でしか身に着けることが出来ない技術や知識については知らない事が多くあると思う。その為、最前線で教育普及活動を行う海響館において、学芸員の知識を活かした種名板や展示の作成やオープンラボの補助を通して、私が身に付けていない技術や知識を身に付けることで、どの様な場や状況においても教育活動が行える学芸員になることを実習目的にした。

実習概要：海響館での博物館実習では15日間のリキュラムが組まれていた。基本、業務は魚類展示課職員と一緒に行動して作業を行った。バックヤードにあるネズミフグやロングスパインバーフィッシュの稚魚を飼育している水槽の掃除や換水、職員が担当する水槽の餌の準備などが主な業務である。その他の業務としては定置網で採取され、今後展示される予定のある生物の搬入、バックヤードや展示水槽で死亡した個体の解体・標本化などを行った。15日間の中で獣医療、海獣の業務をそれぞれ1日ずつ見学した。獣医療の実習ではアシカ、アザラシ、ペンギンの検温やレントゲン検査、投薬治療やトランスポンダーなどを見学した。また、獣医課課長が以前行われた講演会のビデオを見て、獣医としてどの様な視点で生き物を観察しているのか話を聞いた。海獣課では、毎月1回行われるイルカの体重測定や音響室から職員に解説をしてもらいながらショーの見学、ペンギンエリアで行われる餌やり体験の補助や解説イベントの見学などを行った。

実習成果：海響館での博物館実習では、水族館職員として飼育している生き物に対する理解することの大切さと来館者に対して解説の仕方や接し方について学ぶことが出来た。学芸員である職員に言われた学芸員養成課程で履修する博物館展示論や博物館教育論の講義内容の重要性について、解説の基礎やパネル作成時の注意点について大きな関係性があることに気づけた。私たち博物館実習生が基本としている生物の知識や観察の仕方などは、来館者とは大きく異なっている。幅広い年齢層の来館者に対して、誰にでも理解出来る種名板や解説パネルを設営するには伝える情報の取捨選択や記載する絵や写真などのレイアウト、展示物を配置する場所などにも注意する必要があるということに気付けた。特に海響館では家族連れが多く来館するため、企画展の題材などにも生物に対して記載する情報は3つまでにするなどの細かなルールが海響館で決められていることが分かり、展示を見ただけでは気付くことが出来ない細かな工夫があることを学んだ。

感想：今回行った博物館実習では、普段の学校生活では経験することができない体験を行うことが出来た。イルカショーを見学させていただいた際に、イルカに対しての学芸員の生き物との関係性が勉強になった。学芸員がイルカやアシカのトレーニングの際に、生き物の限界を人間である自分たちが決めつけられないというもので、トレーニーでもある学芸員がイルカたちのパフォーマンスの上限を決めつけてしまうことで、個体の成長を止めてしまうので、学芸員である自分自身を中心として様々な事にイルカたちと挑戦していく事が海獣課としての共通認識であると言われていた。この事は私にも当てはまると思い、これからの人生において自身で限界を決めずに挑戦することの大切さを知った。海響館での博物館実習で学んだことが大学生活4年間で特に印象に残るものとなった。

学生番号・氏名 : 6320085・八田 瞳  
実 習 先 : 下関市立しものせき水族館 海響館  
実 習 期 間 : 令和5年10月2日(月)～令和5年10月16日(月)

実習目的：海を活用した幅広い教育普及活動に取り組まれているなかで、大きなテーマを持って取り組まれているやり方を学びたいと考えた。海響館では、海洋教育として「海に親しむ」、「海を知る」、「海を利用する」、「海を守る」の4つのテーマで活動されていることを知った。この海洋教育分野の豊富さは、他の水族館が生態としての魚や水族館が隣接する周辺環境について活動している園館が多い中、海について幅広く取り扱っている水族館は海響館だけであると私は考える。そのため、魚だけでなく海について学習テーマを広げている海響館で教育の仕方や取り組み方を学びたいと考えている。特に博物館実習カリキュラムの中で私が学びたいことは、オープンラボの実習を通して、他種ある教育普及活動の方法についてである。オープンラボの補助や実際に実施する際、海洋教育の企画・運営方法やどのようにしてテーマや内容を決めているのかなどの取り組み方を学びたいと考えている。

実習概要：午前中は基本的に水族館飼育スペースの見回りや調餌、給餌、アクリル面の掃除などを飼育員と行った。午後からは実習生が行う作業として、バックヤードの水槽底掃除や担当水槽の掃除・換水、キッズスペースの整理などを行った。その他にも、生体の手術や解剖見学、輸送用のパッキング補助、展示個体変更の補助、展示個体薬浴や淡水浴補助を行うときに声掛けを受け作業した。イベントでは、オープンラボの補助や次回レジュメ作成補助、体験イベントの見学を行った。獣医実習ではアシカの血液採取や内視鏡トレーニングの見学、山口大学の獣医学部に向けて行われた講義動画視聴をした。海獣実習では、スナメリの採血や海獣イベントの見学、アシカの体温測定トレーニングを行った。ペンギン実習では、ペンギン館の教育的展示物の説明を受け、イベントの見学を行った。また、課題として「海響館での展示 or イベントを作る」では、神田川での生物採集会を企画した。

実習成果：実習目的として、海響館での教育の仕方や取り組み方、オープンラボでは海洋教育の企画運営方法を学ぶことを目的としていたため、解説板の取り組み方について学んだ。解説板としての「pick up」では、観覧者の話している内容から「ニモ」に似た生物を「ニモじゃないんだよ」といった内容の解説文を作る方法や、水槽内に大量発生した「ハイクラゲ」を紹介する解説文を作る取り組みを学習した。給餌解説では、観覧者の年代や集客具合で話し方を変えていること学び、年代で変えるのは知っていたが、集客具合でも変えることを学んだ。実際マンボウの給餌解説では通路が通れなくなる時があり、話の長さを短くすることでその問題が解消されたので大切さを理解した。ペンギンチームでは、展示物の教育的視点での施設見学を見学し、ビデオの見せ方だけでもペンギンの眼を除いた先にモニターを設置や、お手洗いの近くに設置し待ち時間に見るなど見せ方の工夫を学んだ。その他にもペンギン施設では様々な方法で教育普及ができるようにパズルやすごろく、クイズや動画、イベントを取り組み幅広い層の来館者に見てもらおう工夫をしていることを学んだ。

感 想：博物館実習では、飼育員についていき作業を見学や補助させてもらうことが基本であったため、自分から声をかける積極性が重要な実習だった。しかし、その分自分が知りたいことや興味を持っていることをさせてもらうことができた。積極的に声掛けさせていただいたことで、何か特別な作業をするときにも声をかけてもらい立ち合いをする機会を多くいただき大学生活で特に印象に残るものとなった。今回の実習では常に飼育員に解説をしていただいているも同然であったため、貴重な時間をさいていただいたことに感謝しかない。注意点として、各校で実習ノートに記入していただく内容が異なるため、事前訪問で説明をすることが大事であることが分かった。また、施設長のサインは急に押してもらえないものなので事前に打ち合わせをする必要性を学んだ。

学生番号・氏名 : 6320095・古川瑠里  
実 習 先 : 大分マリンパレス水族館 うみたまご  
実 習 期 間 : 令和5年10月11日(火)～令和5年10月21日(土)

実習目的：大分マリンパレス水族館うみたまごでは「楽しく学ぶ水族館」というテーマが開館当初からあり、インダイやインガキダイによる曲芸の披露を行ったり、イルカのプールとお客様が遊ぶビーチに境目を作らない「あそびーち」という施設を作ったりと、斬新かつ面白い方向から学びを提供している水族館である。また、このテーマは私の水族館で楽しいと思ってもらえる教育を行いたいという目標と同じであることから、大分マリンパレス水族館うみたまごで楽しい教育について理解を深めることを目的に博物館実習を行いたいと考えた。さらに、楽しい教育のことだけでなく実際に水族館で働く学芸員には何が求められているのか、飼育員として必要な力や知識を学ぶ機会にしたいと考えた。そして、この博物館実習で学んだことをマリンバイオセンター水族館でも活用し、目標とする学芸員像にさらに近づけるように努力をしたいと思う。

実習概要：私は10日間の実習の内、9日間を魚類グループで実習し、最終日に企画・開発グループで実習をした。魚類グループでの実習では主に水槽の底と壁面の掃除やエビの殻剥き、マアジの三枚おろしなどの調餌、展示水槽やバックヤード水槽への給餌を担当者と一緒に行った。その中で、ワンポイントという小学生にバックヤードを案内するツアーに補助として付いたり、ネンブツダイの採集の補助として館外で活動したり、盲学校の生徒にエイやマアジ、ボラなどの給餌体験の補助をしたりした。また、大分マリンパレス水族館うみたまごの職員と福岡にある専門学校の方が、冬に行う合同展示について会議を行う際に、これも水族館が行う教育のひとつであるという理由から会議を見学した。最終日の企画・開発グループではフタユビナマケモノとムツオビアルマジロの給餌や触れ合いタイムの補助、ムツオビアルマジロの新しい獣舎で使う排水パイプの作成などを行った。

実習成果：飼育業務を通して魚病の対処法や、給餌をする回数や餌を投げる位置について、観察をする上で見るべきポイントなど様々なことを教えてもらったため、飼育員として必要な力や知識を学ぶことができた。また、それらを学ぶと同時に私が持っていた知識はまだ不十分であり、勉強しなければならない事に気づけた。ワンポイントでは職員が子供からの質問に真剣に答えている姿を見て、これこそ楽しい教育の根源なのではないかと感じた。子供からの質問には一見おかしな内容もあるが、真理をついている時もある。その質問に真剣に答えることで子供にとって良い思い出となったり生き物に興味を湧くきっかけになったりすると考えた。休憩時間や作業の合間にはなぜ生きた生き物を展示するのか、教育は利益が少ないが民営の水族館ではその部分をどのように解決するのか、これからの水族館の存在意義について話し合う機会があり、どのような位置づけで水族館を運営していくのかを考え直す良い機会となった。

感 想：主に日常業務に関わる実習が多かったためポイントガイドや解説板作りなどはしなかったが、担当者の方と話す中で学芸員の観点からこれからの水族館について再度考える機会を作ることが出来た。この経験から沢山質問をして話題を広げる力が必要だと感じた。また、展示水槽のガラス面の掃除を任されたが汚れが残っていた際に「任されたことは責任を持ってしてください。」と注意を受けた。その時に私は実習生という立場に甘えていたのだと気づき、例え実習生や正社員、アルバイトなどどんな立ち位置であっても仕事をするということには変わらないため、いかなる時でも気を抜いてはいけないということを学んだ。私の実習担当をした皆様は、私の質問に真剣に答えてくださったり作業が出来ていない時や実習日誌が読みづらい時に叱ってくださったりと、私の成長を思って発言していることが汲み取ることが出来た。私も上に立つ人間になった際は人の成長を願って発言できるようになりたい。

学生番号・氏名 : 6320110・迎川陽平  
実 習 先 : マリホ水族館  
実 習 期 間 : 令和5年11月16日(木)～令和5年11月29日(水)

実習目的: マリホ水族館は商業施設の中の水族館でありながら、ユニークな企画展や、広島の海の展示、季節の水槽展示など来館者を引き付ける面白い展示が多数されている。また、商業施設の中の水族館で子供連れの来館者が多いことから、私が水族館の学芸員として行いたいと思っている「水族館を利用した自然教育活動」を実現させていくために必要な力や知識を付けるためにもマリホ水族館での解説実習はとても有意義なものになると考えた。また、学芸員の解説実習だけでなく、水族館の飼育業務やイベントの対応なども経験させていただけるということで水族館の飼育業務やイベントの設営など水族館の様々な業務について学ぶことができると考え実習を希望した。

実習概要: 平日と休日の午前中は飼育実習を行い、休日の午後は学芸員実習を行った。飼育実習の詳しい内容は、午前中の開館前に全水槽の測温、水槽の亚克力面のコケ取り、底砂掃除、残餌・排泄物・死亡魚の回収をし、開館作業として全水槽の照明、ハイドロ、モニター、館内音響を作動させた。開館後は調餌をし、給餌をしながら、バックヤード水槽の換水や午後の潜水ショーに向けたタンクの準備などを行った。午後は2回目の測温、給餌を行い、バックヤードのシンクや床の掃除を行い、閉館時間になると見回りを行い、亚克力面の拭き掃除と館内のアルコール消毒を行った。学芸員実習の内容は、解説実習とウシバナトビエイの標本製作であった。解説実習は休日の午後に決めたコーナーに立ち、1日30～50分の解説を3セット行うというもので、生き物に興味がない人の興味を誘い、いろいろな生き物の解説を行うことで展示生物について知ってもらうことが目的であった。

実習成果: 学芸員実習として行った解説実習だが、この解説の目標は、「水族館の展示生物について興味がない来館者に対して声をかけ、解説を行うことで興味を誘い、長く解説を聞いてもらう」であった。声をかけた時点で断られることもあったが、声かけの仕方によって断られる確率というのは少しばかり減らすことができることを学んだ。「お時間ありますか」という聞き方は「ありません」という返答も出来てしまうためすぐに会話が終わってしまう可能性がある。そこで「この生き物綺麗ですね」などと声をかけることで、前者に比べて会話がすぐ終わってしまう確率は低くなったと感じた。また、生き物についても共通点を見つけながら話を展開すると、次の生き物の解説へ話を繋げやすいため長く解説を聞いてもらいやすくなった。私は瀬戸内の海コーナーで、「毒を持つ魚」や「群れて泳ぐ魚」など関連性を持たせることで話の流れを作り解説時間を自然と長くするということを実践した。この方法は広島県の里山のコーナーでも実践し、両コーナーでいい効果を発揮した。関連性のない生き物を繋げて解説するのは来館者の興味を持ち方によって難しい場合もあり解説が短くなってしまいう傾向が見られたが、関連性を意識して話をすることで時間自体も長くすることができ、来館者の方の興味を惹くこともできることを学んだ。

感 想: 今回の実習期間はマリホ水族館で行われている特別企画展の入れ替え期間だったこともあり、後半の飼育実習は調餌や給餌だけではなく水槽の掃除・移動や濾過槽のリセット、立ち上げなど普段の実習では行わないような作業も実習の中に組み込んでいただいた。エーハイムなどの機材もたくさん触る機会があったので実習前に比べて扱いに慣れることができた。このような機会に作業に参加させていただけたことで企画展の設営や作業などについて理解を深めることができた。休日午後から行った解説実習では、いろいろな声のかけ方を試し、来館者の反応を見ながらどんな声かけをすれば解説を聞いてくれやすいのか、その後の解説に繋げやすいのかを学ぶことができた。お忙しい中今回の実習を受け入れてくださったマリホ水族館のスタッフの方々に深く感謝している。

学生番号・氏名 : 6320115・山崎亜蓮  
実習先 : 島根県立宍道湖自然館ゴビウス  
実習期間 : 令和5年10月11日(水)～令和5年10月17日(火)

実習目的：島根県立宍道湖自然館ゴビウスでは生き物の飼育展示はもちろんであるが毎週開催のスポットガイド発表や地域の小学校を招きバックヤードのツアー、環境学習など教育普及活動を頻繁に行っているため、自分の学びたいと考えていた生き物の特徴を分かりやすく伝えたり来館者の年齢に適した伝え方などの教育普及活動のノウハウを最も学べる館だと思い実習を行った。ほかにも基本的な水族館業務を体験することで水族館運営の方法、学芸員の在り方や実務能力の基礎を身に着けることを目的とした。

実習概要：ゴビウスの実習では飼育展示業務、環境修復プログラム、出張水族館、スポットガイド作成を行った。飼育展示業務では展示生物の水槽掃除や調餌、給餌など水族館運営に係る基本的な業務を行った。さらに生き物の飼育方法だけでなく、水槽の循環や構造も学んだ。環境修復プログラムではゴビウス付近の生き物の採集や過去のデータから対象の生き物の生息地の変移を調べたり、日本産魚類検索を用い採集した生物の同定を行った。出張水族館ではサンレイクという施設でタッチングプール、水生昆虫やカメなどの爬虫類を展示した。スポットガイドでは好きな生き物の一つを選び、その生き物の特徴などを紙芝居という形で作成した。作成するにあたって、一方的なスポットガイドにならないように質問を来館者に投げかけたり、しっかりと来館者の目を見て反応を見つつスポットガイドを行った。

実習成果：飼育展示業務では水槽に展示している生き物の特徴を理解し、その生き物に適した餌のやり方、飼育温度の調整による体調管理を徹底しており、さらには展示としての見栄えを引き出すための工夫なども学ぶことができた。他にも生き物だけでなく、水槽の循環や濾過槽についても学び緊急時に対処できるようになることは水族館で働くうえでとても大事なことだと思った。スポットガイドでは生き物の特徴などを紙芝居という形で作成した。作成するにあたって、一方的なスポットガイドにならないように質問を来館者に投げかけたり、しっかりと来館者の目を見て反応を見つつスポットガイドを行った。スポットガイドの題材として実際に水族館で飼育するオオミズスマシという生物を扱った。この生き物にはおいが特徴的でポイントガイド中において来館者にかいでもらうことで興味を惹きつける要素も取り入れることができた。園館で行われるスポットガイドは約7分だったがサンレイクの出張水族館でのスポットガイドではたくさんのおし物や体験コーナーがあるためお客さんに園館で行ったほどの時間がないと考えた。そのため内容を大幅に短縮しその場に適したスポットガイドができ、臨機応変に対応できた。

感想：スポットガイドでは来館者とのやり取りが一方的ではないよう意識し、興味を惹かせ続ける発表ができたがマスクをしていたこともあり少し声が小さいというフィードバックをうけた。しかし、その後行ったサンレイクでのスポットガイドではすこし会場がにぎやかだったこともあり声を張り、聞きとりやすい声量で行うことができた。飼育業務に関しても一度教えてもらった作業は、帰宅後メモを見返し、しっかりと覚えることができた。環境修復プログラムでは魚の同定を行ったが、魚の知識が乏しすぎたためとても時間がかかったためある程度の知識を入れておく必要があると感じた。



学生番号・氏名 : 6320027・兼松良介  
実習先 : 虹の森公園おさかな館  
実習期間 : 令和5年8月13日(日)～令和5年8月26日(土)

実習目的：私が博物館実習先に虹の森公園おさかな館を選定した理由を以下に述べる。この施設は四万十川をはじめとする淡水魚を中心に、河川的环境や、それらを包括した自然の魅力を展示・紹介している。私が以前に当館を訪問した際に目にしたデンキウナギでは、その発電力をイルミネーションの点灯という来館者に対して”見える化”する展示方法に深い印象を受けた。また、当館は「道の駅 まつの」の一角に在り、この道の駅の従業員全員で朝礼を行い、人手が不足している部署のサポートに就くことも共有している。当館で学芸員実習を受けることで、水族館スタッフや道の駅の各部署の方々との協働作業を通して、協調性とコミュニケーション能力を培いたい。加えて積極的な探究心をもって実習に臨み、当館独自の教育プログラムを受けることで、学芸員を目指す自身の資質と姿勢を磨きたい。

実習概要：実習期間は毎日イベントが行われていた。1日の流れは「カワウソのおやつタイム」からはじまり、「ペンギンとのふれあい体験」と「おさんぽペンギン」、「ペンギンのお食事タイム」、午後からは「カワウソのお食事タイム」と「おさかな館探検隊」であった。実習1日目は館内の案内、日常業務やイベントの説明を受けた。また、その日は道の駅で「森の国の夏祭り」が開催されたため、16時過ぎからは机や椅子の準備、祭りではおさかな館としての的あてゲームの出し物をし、私は景品の受け渡しやイベントの片付けを行った。2日目以降は日常業務に加え、イベントの見学やアナウンス、数日間見学した後は実際にイベントを担当し、最終日は全てのイベントを担当した。イベントから閉館までの空き時間や終業時刻後には広見川や河口、付近の池や森の国ファーム裏の用水路などの生物調査を行った。

実習成果：おさかな館における実習では、通常的水族館運営の他、地域行事の机や椅子の準備や片付け、冷蔵庫の運搬など、館外や道の駅での多岐にわたる業務があり水族館の地域連携を強く感じる事ができた。水族館日常業務において、オーバーフローやバタフライ、プロテインスキマーなど、大学での研究には用いない機材の意味や使用方法を学ぶことができた。「おさかな館探検隊」では来館者約10名を連れて館内のカワウソ、ピラルクー、バックヤード、濾過槽、デンキウナギについての解説を行い、来館者の反応を見つつ、質疑応答をすることでコミュニケーションを磨くことができた。「おさんぽペンギン」では、マイクを使って館内で解説、「ペンギンのお食事タイム」ではマイクを使って屋外で解説をした。両者のイベント経験をすることで、館内と屋外で必要な声量の違いを学んだ。ペンギンのお食事タイムでは、ただ単に給餌と解説を行うだけでなく、「給餌前にどの個体が何処で待機していたのか」、「何処で餌を食べたのか」、「運動があったのか」、「どの個体がどれだけの量を食べたのか」を覚えると、給餌においての多くの観察点があることを学んだ。

感想：実習期間中は毎日イベントが行われ、初日から1日の流れを見学させて頂き、アナウンスやバックヤードでの解説など、できる部分から取り組む方針の指導をして頂いた。この方針により、段階を踏んで学ぶことができ、より質の高い解説が行えるようになったと感じた。空き時間や閉館後は、ため池のマミズクラゲ調査や私の希望したテナガエビの採集など、貴重な体験をさせて下さったおさかな館の方々には感謝の気持ちでいっぱいである。来館者の方から以前展示していた生き物や展示中の生き物についての質問を受けることがあるが、日常業務でどの水槽がどういったコンセプトなのか、開館作業での疑問点や学んだことをしっかりと覚えておくと、胸を張って来館者の方に説明ができる。短い実習期間ではあるが、是非沢山のことを吸収してもらいたい。

学生番号・氏名 : 6320025・加地望鈴  
実 習 先 : 公益社団法人 桂浜水族館  
実 習 期 間 : 令和5年9月4日(月)～令和5年9月17日(日)

実習目的：学芸員を志すにあたり、学芸員として「面白いと思える展示」をしたいと考えていた。そこで、他の水族館にはない SNS 運用で行い人気を博している桂浜水族館に実習に赴くことで、自分の考える「面白い」とはなにか、また来館者が面白いと感じる展示は何かを明確にし、自身の曖昧な目標を具体化することを実習の目的とした。また、桂浜水族館では動物のありのままを見せることをポリシーとして掲げている。これは飼育している動物がやりたいように行動させ、やりたくないことはさせないという意味合いである。そのポリシーから、従来行っていたショーの廃止を決定するという思い切った行動に出た経歴もある。そのような園館が掲げる動物のありのままとはどういったものなのか、またはそのありのままを見せることで来館者にどのような感想を抱かせるのかを実際に来館者の反応を見ながら学ぶ事で、今後学芸員として水族館で行う展示に活かしていきたいと考えた。

実習概要：桂浜水族館での学芸員実習では、魚類チームと海獣チームそれぞれに配属され、いずれも主として日常業務の補助と、餌やり体験に用いる売り餌の補充を行った。日常業務では、魚類チームでは汽車窓水槽の掃除、水槽の拭き上げ、ウミガメプールの残餌回収を行い、海獣チームでは与えるアジやサバの適不適を仕分ける調餌、アシカの給餌を兼ねたトレーニングの補助、ペンギンの給餌を行った。また、実習期間後半の一週間では、上記の業務に加えて、学芸員実習の課題として自分が思う桂浜水族館に足りないものを題材とした発表を行った。私は桂浜水族館 2F にある「ほねほねルーム」に展示されている鯨類の骨格標本が利用できるのではないかと考え、骨の構造から見える動物の動作についてトークコーナーを設け、発表を行った。

実習成果：各所の売り餌を補充する際、来館者が売り餌を与えながら、生体をよく観察している様子が見られた。また、給餌の補助を行っている際に学芸員が生体について解説を行うと、来館者は非常に興味深そうに、かつ楽しそうに話を聞いており、その行動が起こるかどうか観察を行う様子が見られた。このことから、自分の考える面白い展示というものは、実際に何かを行うか、得た知識をすぐに確認できるような体感・体験を伴う展示ではないかと具体的な目標が見えた。また、業務や飼育に関する指導の際、「動物に教えたことをやって欲しいとき、指示という言葉は使わない。動物がやりたくないことはやらなくていいから」といった心構えに関することから、「調餌は直接的な利益が発生しないため、なるべく手早く終わらせる」といった営利面に関する考えなど、飼育員によって異なるさまざまな考えを聞くことができた。

感 想：どこの園館でも共通することだとは思いますが、やりたい事をやりたいとしっかり伝えと、それを実現するために様々な配慮をしてくださった。実習初日に、緊張している私に実習担当の土居さんが「実習生は無敵だ」という言葉で励ましてくださった事が強く記憶に残っている。また、来館者との距離も近く、常連の方にたびたび励ましのお言葉と共にお菓子をいただくなど、全体的に非常にフレンドリーな園館だったように感じた。想像していた実習と大きく違った点として、特に最終日が顕著であったが、連休などのイベントが重なると、実習生も仕事を一人で任される場面が多かった。この事から、桂浜水族館での学芸員実習は「学芸員としてのなんたるかを学びに実習へ赴く」事に加えて、「実際の仕事として水族館で働く学芸員はどういうものなのかを実感する実習」を体験できると感じた。

学生番号・氏名 : 6320080・西村康太郎  
実 習 先 : マリンワールド 海の中道  
実 習 期 間 : 令和5年9月2日(土)～令和5年9月15日(金)

実習目的：私が学芸員養成課程を履修した動機は、幼い頃に水族館で感じた感動をこの養成課程で詳しく学ぶことで、多くの人に伝えたいと考えたからだ。幼い頃のこの感動は、ただ綺麗という印象だけで終了していたが、「博物館資料論」や「博物館教育論」などを学び、今では全ての水槽や標本は「教育」に結びつくことを知った。この学びを通して、学芸員はゲストに自然の大切さ、生物の素晴らしさを教える人物だと考えるようになった。このように私は、自身が感じた感動を展示を通して多くの人に伝えたいと考え、学芸員養成課程を履修した。私が海の中道を実習先に選んだ理由として、他の水族館と比べて「教える」という教育に力を入れていると考えたからだ。なぜなら、海の中道は定期的に生き物に関する講演会や野外体験イベント、干潟を活用した体験活動など教育活動を定期的に行っている。これらの活動から、この水族館は教育に力を入れていると考え、「教える」という立場である教育者の視点での水族館の在り方や水槽の展示方法などを学びたいと考える。

実習概要：実習では、最初の2日間に座学、4日間の飼育実習、3日間の来館者調査、4日間の展示企画の構想及び発表を行った。座学では学芸員実習で学んだことを海の中道で行っている活動と共に水族館の役割や営業戦略、調査に関して大変興味深い内容を聞いた。飼育実習では海獣と魚類の仕事の手伝いを行い、生の現場の仕事や実際に水族館職員に対して話を聞くことができた。来館者調査では最終日に行った企画展を考えるための来館者からの声を聞くために自分たちで質問の内容を考え、QRコードを利用した誰でも手軽にアンケートに回答してもらえるような工夫や来館者がアンケートに答えてくれるようにポストカードを準備したりした。展示企画ではアンケートの結果を用いてパワーポイントで発表原稿を作成し、最終日に館長や他の職員の前で自分たちの考えた企画の発表を行った。

実習成果：今回の実習で学んだことは、水族館の機能である「種の保存」、「調査・研究」、「レクリエーション」、「教育」の大切さを再認識することができた。特に教育では対象となる年齢や学年に合わせて彼らが利用している教科書から着想を得た資料をいくつか作成しており、館内ツアーでは誰でも案内できるように原稿やネタ帳を準備していた。一方、配付資料にはポップなイラストで親しみやすい工夫や合間にクイズを挟んだりすることで話を聞いて飽きない工夫をしていた。また、話し方では親しみやすい声色やハキハキとしゃべること以外に、笑ってもらえる小話を用意しておくことで話の内容を印象強く覚えてもらえる工夫をしていた。私はこの学びを通して、水族館の教育活動は多くの人に生物の素晴らしさや自然保護の大切さなどを知ってもらうために積極的に活動をしていく努力と工夫が必要だと学び、多くの人に生き物の面白さ、水族館の存在を知ってもらう水族館の戦略を学んだ。

感 想：私は、今回の博物館実習は大変有意義な時間を得られたと考える。なぜなら、実習に行く前と行った後では水族館に対する見方が変化したからだ。海の中道は、職員一人一人が「お客様に楽しんでいただく」、「まず自分から楽しむ」、「自らが楽しいと思うものをお客様にも伝え、楽しんでいただく」の3つのことを心掛けていた。この目標の通り学芸員実習中に見かけた職員の方々はみんな楽しそうな顔を常にしており、水族館内にもお客様が楽しんでもらえる見えない工夫を散りばめていることを学んだ。この工夫を福山大学マリンバイオセンター水族館で活かしていきたいと考える。最後になるが、今回の学芸員実習を終えてお忙しい中、対応してくれたマリンワールド海の中道の職員の方々、並びに先生方にますますのご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

学生番号・氏名 : 6320013・内野 慧  
実 習 先 : 九十九島水族館海きらら  
実 習 期 間 : 令和5年10月12日(木)～令和5年10月22日(日)

実習目的：私の実習目的は、展示イベントについてである。私が子供のころに海きららで最も印象に残っている内容は、季節に合わせた展示や様々なテーマに合わせた展示が行われていたことである。そのため、実習中には、特別展を行う時に何を意識してテーマを決めているのか、大切にしている事は何か、または他の園館と連携についての手続きや流れなどの業務について学びたいと考えている。また、この博物館実習で、館内でしかできない実体験や実技を学び、学芸員に必要な知識や技術の基礎を習得することが目的である。私は現在、大学のマリンバイオセンター水族館で勉強していて、生き物の飼育や管理を学んでいるが、大規模な設備ではないと飼育できないイルカや大水槽で行っている点検や飼育作業、そして決めたテーマに沿った発表や展示物作成など、普段体験することができない作業を行い、学芸員として少しでもふさわしくなれるように知識を身に着けたいと考えている。したがって私は海きららの博物館実習を強く希望した。

実習概要：実習概要は、施設管理課・イルカ課・あまも場（運営課）・九十九島調査室・魚類課・クラゲ課の6つの職場で実習を行った。施設管理課では水族館の設備についてやどのような流れで装置が動いているなど水族館の施設について学んだ。イルカ課・魚類課・クラゲ課では、生き物に対しての関わり方、そしてどのようなテーマを持って水族館に生き物が展示しているのかやどのようにしたら生き物の特徴を上手く見せられる展示にできるのかという工夫について学んだ。さらに来館者へ解説するとき何を意識して説明するのかについても学んだ。あまも場では子供との関わり方や地域交流の場としてやるべきことを学んだ。九十九島調査室では、国立公園という自然をどのように伝えたら子供にうまくわかってもらえるのか、そして生物調査では何を意識して観察するのか、地域交流の場として水族館はどのように子供たちに自然について学んでもらうのかを教わった。

実習成果：私は今回の実習を通して大きく学んだことは二つある。一つ目は来館者への解説や展示の見せ方についてである。餌やりでは何の餌をあげているのかを知ってもらうために、来館者からの視点で見えやすいように意識して餌の投げる場所を考えたり、解説するときにも自分から教えていくのではなく、来館者自身に興味を持ってもらってもらうように剥製などの資料を用いて行うことが大切だと学んだ。二つ目は地域交流の場として水族館は大切な立場にあるということだ。水族館は学校の博物館連携として国立公園について話をしていて、その際に話を聞いている小学生に合わせたクイズを入れて、飽きさせないように自然について話していた。また、地域の方に生き物の解説をしてもらったり、一緒に工作や自然探索を行うことで、地域の方と深く交流し地域活性化に大きく関係していた。地域交流は地域活性化だけでなく、地域の子供に楽しく自然を知ってもらうきっかけになるのでとても大切なことであると学んだ。

感 想：今回の実習は、普段学ぶことができない知識や体験を学ばせてもらった。海きららが九十九島に対してとても強い思いがあることが伝わってきた実習であった。反省点として最後の実習で行ったラボコーナーでの解説で、用意していた剥製の生き物以外について質問を受けたときに、間違えてしまった知識を伝えてしまいそうになったので、人気のある生き物や大きくて目立つ生き物の剥製についての情報は調べておく必要があると思った。アドバイスとしては、質問やメモをよく取らないと実習先の方にやる気がないと感じさせてしまうと思うので、元気に明るく実習することが一番重要であると考えた。海きららの従業員の方たちはとても優しく明るく接してくれたので、最後まで楽しく実習することができた。おかげで大学生活の中で一番印象に残るものとなった。

学生番号・氏名 : 6320031・川寄文太  
実習先 : 西海国立公園九十九島水族館 海きらら  
実習期間 : 令和5年9月25日(月)～令和5年10月8日(日)

実習目的：九十九島水族館海きららでは地域密着型の展示や、九十九島パールシーリゾート内の施設を用いた教育活動に力が入れられており、水族館が持つ役割である教育の場としての意義を十分に学ぶことができると考え実習を決意した。海きららでは九十九島とその近海の生物を中心とした展示が行われており、その地域特有の生態系や、身近で起きている環境問題について学ぶことができる。ここから私は展示対象が限られた中でどのような見せ方をしていくのかということや、地域の人々とのつながりを強いものにするためにはどのような活動や心構えがあるのかということについて学んでいこうと考えている。また海きららでは展示や館内外の施設を利用した教育活動についても盛んに行われており、近年より一層教育の場としての意味を求められる水族館において、学芸員としての心構えや現場でのリアルな教育体験を得ることができると考えている。

実習概要：海きららでは各部署に分かれての実習形式をとっており、部署ごとに担当の人から業務を学ぶ仕組みとなっている。「施設管理課」ではろ過装置の点検や各種設備の解説を、「イルカ課」ではイルカとのかかわり方や日々の健康管理を学んでいく。また「九十九島調査課」では九十九島の環境調査や自然体験学習の案内を、「あまもば」では子供たちへの教材づくりやサービスの案内をといたように教育系の活動も多く行うことができる。ほかにも「クラゲ課」ではクラゲへの給餌や水替えを「魚類課」では給餌や水槽の清掃について学ぶといったように飼育生物の管理から教育活動、飼育設備の管理など多種多様な活動を行うことができる。また実習の最終日には出口付近で標本を用いた生物の解説を来館者へ向けて行うこととなり教育についての実践的な経験を積むこともできる。

実習成果：私が海きららでの学外実習を通して得た成果として、大きく二つのことが挙げられる。一つ目は水族館での教育活動について現場でのリアルな経験を積むことができたということで、これは「あまもば」での小学生以下の子供たちを対象とした教材づくりや、最終日の標本を用いた生物の解説といった教育活動を通して、実際にお金を払って来てくれている来館者への責任感や、教育の対象となる相手へ対応した内容を考えるとといった経験から感じるようになった。実際に行ってみるとやはり想像通りにはいかず、何度も修正を繰り返しての活動となったが、現場の空気を感じながら取り組むことができたと感じている。二つ目は地域密着型の水族館がどのような活動を行っているかを知れたということで、これは九十九島やその近海を再現した展示や、地域の小学生に向けての教育活動を見て実感することとなった。また展示や教育活動はもちろん、地域住民が撮った九十九島の生物の写真や制作物に関するコーナーを用意して展示されており、地域密着型の水族館の在り方について深く学びを得ることとなった。

感想：今回の博物館実習を振り返って、最初に日々の忙しい業務の中、自分に対して適切な指導を行ってくださった海きららのスタッフ皆様に深く感謝申し上げます。海きららでの実習は水族館での基本的な業務はもちろん、実習期間中にイベントが行われていればそれにも積極的にかかわらせてもらえ、毎日多くのことを学ぶことができるため、実習先として大いに推薦したい。また実習に行く際に気をつけることとして、あいさつと返事、積極的な姿勢は特に大切にしていきたいと思います。

今回の実習は自分にとってとても有意義なものであり、およそ二週間があっという間に感じるほど濃密な学びを得ることができた。地元の水族館ということもあり、これまで来館者としてよく訪れていたが、運営する側に立ったことでまた別の視点を持つことができるようになり、大学生活4年間で特に印象に残る活動となった。

学生番号・氏名 : 6320070・玉井優希  
実習先 : 特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会付属 黒島研究所  
実習期間 : 令和5年10月17日(火)～令和5年10月30日(月)

実習目的：私は島根県隠岐郡隠岐の島町にある、離島の水産高校出身である。そのため、私は隠岐の島と同じく本土から遠く離れた離島にある黒島研究所では、どのような活動が行われ、どのようにして地域に貢献しているのかについて自分の目で見て知りたい。また、本土から遠く離れた離島にあるということは、通常とは異なる集客方法や運営方法が取られていることが予想されるため、その実態について自分の目で見て知ることができるとともに、その特色について理解することを目的とした。さらに、学芸員に加えて、中学校・高等学校の教科「理科」と、高等学校の教科「水産」の教職課程も履修しており、教育実習については、出身校である島根県立隠岐水産高等学校で実習を行うため、離島という点に注目して、博物館の教育普及活動について学び、「博物館教育」と「学校教育」の相違点と共通点について、自分なりの結論や考えを見つけることも目的とした。

実習概要：日常業務として、開館作業では館内の清掃やクジャク・フクロウの給餌を行い、閉館作業では清掃及びフクロウ・ヤギの給餌を行った。また、来館者受付対応では、入館チケットやお土産、ドリンクの販売・管理、館内の案内及び解説を行った。さらに、日常業務以外では、修学旅行生の案内及び館内の解説、ヤギの種付け、調査船の揚げ降ろし、ヤギの骨格標本・キョウジョシギの剥製の補修、展示水槽の掃除、釣りやシュノーケリングでの生物調査、解説パネルの作成、ヤシガニの採集及び乾燥標本の作成、ウミガメの孵化率調査、刺し網の漁獲物外し、草刈りや電気設備の取り外し、排水パイプの修理、スロープ制作といった施設内雑務を実施した。

実習成果：黒島研究所では、ウミガメの研究所でもあるため、ウミガメの産卵状況を把握する「上陸回数調査」や上陸したウミガメのうちどのくらいが産卵したのかを調べる「産卵回数調査」、産卵した卵がどのくらい孵化したのかを調べる「孵化率調査」などが行われている。その中で、私が実習を行った10月中旬から下旬に実施する「孵化率調査」を体験することができた。また、刺し網に混獲されたウミガメの保護や標識放流用タグの装着、修学旅行生の案内といった学芸員として様々な活動も体験することができた。修学旅行生の案内では、全て同じ内容で同じように実施すれば良いのではなく、反応や知識を確認してそのレベルに合わせた案内及び解説の大切さを学んだ。そして、運営方法として黒島研究所では、入館料やグッチ販売だけでなく、修学旅行生やツアー客の誘致も積極的に行っており、さらに県や国からの要請でウミガメの調査等も実施しながら運営しているということを学ぶことができた。そのことから、離島での博物館の運営の課題としてはやはり集客が挙げられることを肌で感じた。

感想：今回の実習を通して、飼育や案内だけでなく事務的な作業など、様々な業務を体験することができた。黒島研究所は、博物館・水族館であるとともに研究所でもあるため、調査研究活動も積極的に行われており、それらに参加することができた。実際に学芸員の知識や技術を見ることができとことで、大学の授業で得た知識だけでなく、現場で実際に経験し学んだ「技術」がとても重要であると強く感じた。特に黒島研究所では水族館としての飼育技術や生物採取、博物館としての資料の保存方法や管理方法など、学芸員としての様々な分野の技術や知識が必要であると感じた。また、離島で実施されている教育普及活動についても多くのことを学び、実際に見て知ることができたので今後の活動にも応用し、次のステップに繋げていきたい。

学生番号・氏名 : 6320124・若松朋花  
実習先 : 海洋博公園（美ら海水族館）  
実習期間 : 令和5年8月23日（水）～令和5年8月30日（水）

実習目的：私は、博物館で管理されている様々な資料や標本に関する知識を得て、環境保全活動と教育普及活動を推進し、地域の方々との交流を持つことができる学芸員となるために、博物館での展示方法や教育普及活動を学ぶことで、魚介類を代表とした色々な動物や植物に対する知識と理解を深めることを博物館実習の第一目的に掲げた。この目的を達成させるために、沖縄県の海洋博公園を実習先に選定した。海洋博公園は、世界最大級の大規模な水族館である、美ら海水族館や植物を身近に感じられる熱帯・亜熱帯都市緑化植物園がある。また、希少野生動物種の保全の取り組みや保護活動、海洋生物に関する教育普及活動に尽力されている施設であり、生物多様性の減少が懸念される昨今において、生物多様性とその保全の重要性を学ぶことができる施設である。私は、海洋博公園において、生物多様性と希少生物の保全活動を通して、学芸員に求められる資質と姿勢を磨きたいと思う。

実習概要：7日間の日程で実施され、前半の4日間を動物研究室、魚類課、後半の3日間を海獣課、植物研究室、植物課で実習を行った。動物研究室の実習では、どのような調査や研究が行われているのかを聞き、実際に魚類の同定、鯰立てを行った。3日間の魚類課の実習では、黒潮、深海、サンゴと分かれ、調餌、給餌に加え、水槽整備や移動水族館の搬出作業を行った。海獣課では、1日の中でイルカ係、保全生物係、マナティー係の業務を担当し、午前に行ったイルカ係では給餌やイルカの給餌体験の補助、サイン出しを経験し、午後に行った保全生物係では、アオウミガメの幼体への給餌、ヘビの解剖を行い、マナティー係では野菜の調餌、給餌を行った。植物研究室の実習は、押し葉標本の作製、標本の追加作業を経験し、最終日の植物課の実習では、外来種であるアメリカハマグルマの除去作業、ラン科の植え付け、バンダーの入れ替えを行った。

実習成果：海洋博公園施設内の美ら海水族館や動物研究室、熱帯・亜熱帯都市緑化植物園で実習を行えたことで、博物館実習の第一目的に掲げた、魚介類を代表とした色々な動物や植物に対する知識と理解を深められたと感じた。また、動物や植物の知識を得るだけでなく、水族館の日常業務でもある、調餌や給餌、水温測定などの業務を通して、海洋博公園が行っている希少動物の展示方法や植物の採集データから環境保全活動についても学ぶことが出来たと感じている。特にジンベエザメやマナティー、深海生物などの希少生物は子孫を残すことが必要であり、種の保存の重要性について学ぶことが出来た。さらに、実際に博物館実習を行うことで、登録博物館として美ら海水族館がある意義やそれぞれの施設の教育普及活動方法を知ることが出来たと共に、最後までやり遂げる、学芸員としての責任感と幅広い方々とのコミュニケーションを通じて、コミュニケーション能力を得ることが出来たと思う。

感想：7日間の実習の中で、魚類課、海獣課、植物課、それぞれの場所で貴重な経験をすることが出来た。魚類課ではサバやイカの調餌、給餌に間に合わせるため走ったり階段の移動であったりで体力不足を痛感したため、体力をつけて実習に臨む必要があった。海獣課の保全生物、マナティーの実習では海洋博公園でしか学ぶことが出来ない学びを得ることができ、魚類以外の爬虫類や両生類などの生物にも興味を持つことが出来た。植物課では特定外来生物、植物の植え付け方を学ぶことにより、より詳しく知りたいと感じた。全体的に研究分野とは異なっていたため知識不足ではあったが、実習を通してより学び、知ることができた。また福山大学の先生方や魚類課の塚原様を初め、海洋博公園の沢山の方の協力があり、博物館実習を取り行うことが出来、感謝の気持ちいっぱいである。最後に今回の実習は自分にとって大変有意義であり、大学生活4年間で特に印象に残るものとなった。